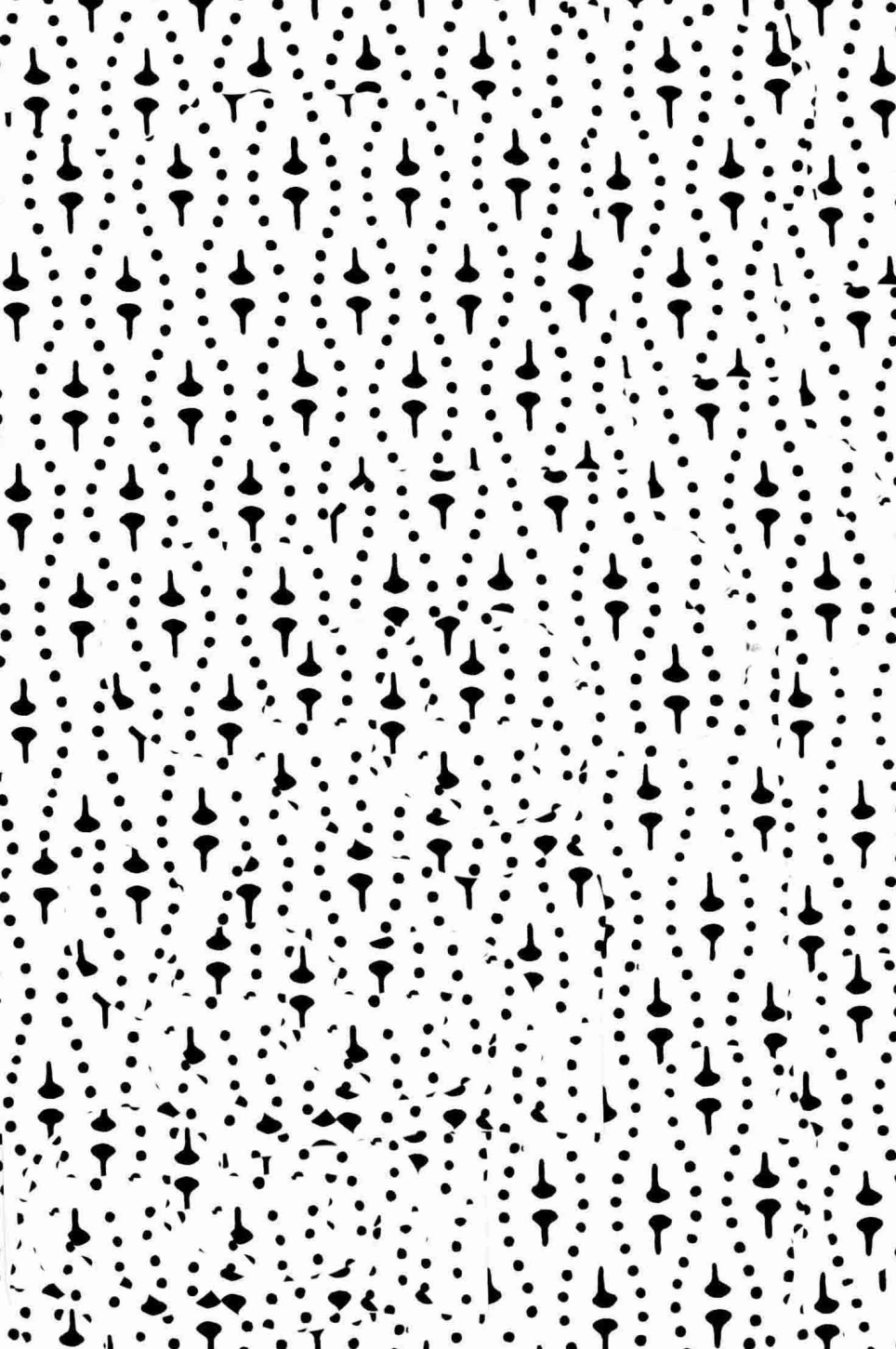


異郷の歌 岡松和夫





初出誌一覧

第一章 文學界昭和五十八年八月号（初出時タイトル「異郷の歌」）

第二章 文學界昭和五十九年十一月号（初出時タイトル「面影」）

第三章 文學界昭和六十年三月号（初出時タイトル「幻視の国」）

純文学
長篇小説

異郷の歌

岡松和夫

カバー装画 越石幸子 「ペロウリーニョ広場」(ブラジル・サルヴァドル)

第一章

一

安岐善夫は真新しいフォルクス・ワーゲンを運転して、日本人の多いリベルターデ地区からセントロの方に向った。脇の席に小森敬三がいる。大通りの先に大聖堂カテドラルの真黒な影が見えた。交叉点は東京と変らない明るさだが、ドームの高い部分は黒ぐろとして巨人のように闇のなかに沈んでいる。高さは六十メートル以上あるだろう。

安岐は若い小森を誘ってリベルターデのバーで酒を飲み、下宿ペンションに送ってゆく途中だった。小森の下宿は歩いても幾らかからない距離だが、一方通行路の多いサン・パウロでは、車はぐるぐると路をめぐる。それが、二十年もサン・パウロに暮している安岐には、少しも面倒ではないら

しい。

「安岐さんは、リベルターデのように日本くさいところは好きではないと思っていたのですが、そうでもないんですね」

小森は親子ほども歳の違う安岐の横顔に話しかけた。

「昔は強情を張って、寄りつくもんかと思っただけで、今は肩を怒らせることを辞めてしまったからなあ」

安岐は小森の方をちらと見た。小森は相手に値踏みされているような気がした。その分安岐に對して泣き言を言うわけにはいかないと身を引き締めるようにした。

小森は学生時代にブラジルに一度来た。大学を卒業して入社した会社がブラジルに進出していて、サン・パウロに派遣された。それが二年前で、今では会社を辞めてしまったが、そのままサン・パウロに残り、日本語新聞社で働き始めていた。月給は二分の一以下になったが、随分自由になったと思った。独身だから、生活をどう変えようと、たいした苦痛にはならなかった。

それでも、会社を辞める時には、日本にいる両親がひどく心配した。一度は帰国して事情を説明するのが穏当な遣り方だろうが、そんなことをすれば、ずるずる日本に引きとめられると思った。両親は諦めたが、手紙のやり取りの間に、叔父が安岐善夫に会って見るようにと紹介状を送ってきた。安岐はサン・パウロでは随分知られた画家のはずだと手紙に書いてあったが、小森は新聞社で確めるまで、名を知らなかった。ブラジルでは、日本人の画家がかなり活躍しているこ

とも、小森はようやく知った。

小森は叔父からの手紙が来ても、すぐには安岐に会いに行かなかった。相手の年齢が違いすぎたし、調べてみると、サン・パウロ・ビエンナレにも出品したことのある画家だった。前途も不確かな若造の自分など、どうせ相手にされるはずもあるまいという気がしていた。

安岐は小森の叔父から手紙を貰ったものの仕事が一段落するまで放り出していた。相手の方から電話でもかけてくるかと思ったが、それもない。それで今日新聞社に電話してみたのだ。

「近頃では、ヨーロッパやアメリカだけではなく、たいていの国で日本人の若者を見かけるね。移民などという昔めいた概念など、もう日本では通用しないんだろう」

「それは、そうですね。ニューヨークの日本食店などで稼いで、サン・パウロで金がなくなるまで遊ぶというのがありますからね」

「いるらしいね。そんなことで性病にかかっても、サン・パウロなら薬局で注射してくれるから、すぐなおる」安岐は笑った。

「今は、一つだけ誓いをたてています」

「ほう」安岐は敬三の方を見た。

「プロスティチュートを買うことはあっても、女の人に惹きつけられて結婚を考えたりすることはやめようと」

小森は意気こんだ言い方をした。

「それは筋の通った考え方だが、実行するのはむずかしい。しかし、最後は日本に帰る気であるのなら、それが一番だね」

「日本に帰るかどうかなど、まだ分りませんが、自由な体でいたいと思っています」

安岐は今度は黙って頷いた。

「安岐さんは一生帰らないつもりでいるのですか」

「どうか。二十三歳でブラジルに來ただけで、日本を離れる時には、もう嫌だ、決して帰らないと思っていた。しかし、実際は何度か日本に帰っているからね。絵の仕事でやって行ける見通しがつくと、日本に対して寛容になった気がする」

「そうですか」

小森は車が下宿のある広い通りに曲ったので、少し体を起し、四つ角が近づくと停めてほしいと言った。

車が停まると、見慣れた若いプロステイチュートが客が來たのかと思つて近づいてきた。その女は、一月ほど前から、金曜と土曜の夜だけ四つ角の街灯の真下に立つて、客を待っていた。小森も通りがかりに声をかけられたことがあったが、今ではその気のないことを見極めたく、ただ笑つて、「ボア・ノイチ」などと言つた。

「素人くさい女だね」

安岐はその女が車の窓に顔を寄せるのを、じつと見返した。

「普段は、何処かでともに働いているのだと思います。白人にしては小柄だし、日本人好みではありませんか」

「そうだね」

女は車のなかの小森に気づいたらしく、自分の方から手を振り、また明るい街灯の下に戻っていった。ハイ・ヒールをはいた足が若わかしいリズムで遠のいてゆくを見ると、やはり欲望が小森の胸に軽く湧いた。

「ここまで来たんだ。君の下宿を覗かせてくれないか」安岐が言った。

「いいですよ」

小森が断らなかったのは、相手が画家で部屋の汚なさにこだわらないと思ったからだ。

「お茶も出せませんが」

「ああ、見るだけでいいんだ」

小森は先に車から外に出た。安岐も車から一度出た後、なかを丁寧に点検して、ドアを締めた。安岐は周囲を見廻した後、小森に付いていった。小森はシャッターの降りている脇の細い鉄の扉に最初の鍵を押し込んだ。そこを入ると、電気をつける。薄暗い明りが古びた階段を照らして二階に通じている。階段の上にもう一つの鍵があった。

「ここが大家さんの家の入口です」

扉が開くと、小森は安岐を招き入れた。すぐ居間になっていて、ソファに坐った日系人の老

夫婦がテレビを見ていた。

小森は簡単に安岐を老夫婦に紹介してから奥の部屋に連れ込んだ。二つ並んだ部屋の一つを老夫婦が寝室に使い、もう一つの部屋を下宿人に貸しているのだ。部屋のなかは二段ベッドを二つ入れているために、全体が物置のようになっていた。

「もう一人、こっちのベッドにも下宿人がいるのですよ」

安岐は部屋の狭さに驚いた。

「月給で暮せるところを探して、ここにしたんです。三食付きだから、食いはぐれることがありません」

小森は丸椅子を持ってきて、安岐を坐らせた。

「まるで移民船のベッドのようだな。移民船だと、上の段のベッドにも人がいるからもっと窮屈だが」

「そうですか。二人とも、ろくに荷物が無いので、これで十分なんです」

「どんな仕事をしている人」

「さあ。この大家さんの知り合いの息子さんらしいですよ。夕方から、もう一つ仕事をしているので、真夜中に帰ってきます。私が目を覚まして、オイと挨拶するだけです。三世だし、日本語を殆ど話せないせいもあります」

「しかし、大学を出て、二年も会社に通っている男が、こんなところでよく辛抱するな」

小森は初めて安岐の好意が若い自分の方に素直に向うのを感じた。

「学生時代、山男だったので平気なんです」

安岐は煙草を一本吸ってから、窮屈な部屋を引き揚げていった。小森は自動車のある所まで送った。プロステイチュートはまだ明るい街灯の下にいた。

「今度は、ばくの家に来ないか。次の土曜日はどうだい」

安岐の招きが親身なのが分って、小森は嬉しかった。

「昼頃にね。フェジョアードでも一緒に食おう」

二

安岐善夫はモルンビー・サッカー場の近くにある自宅に向って車を運転しながら、今まで話していた若い男が少しも屈託する表情のなかったことに感心していた。小森は自由という言葉は何度か使った。自分の若い頃も、確かに自由を得たいと思ったが、あの若い男は会社をあっさりと辞めることで、自由を手に入れたように見えた。それを安直すぎるように思い、会う前までは人間そのものを疑っていたが、あの青年はそれなりの覚悟はしているらしかった。彼は自分を「山男」と言った小森が気に入っていた。確かに、安岐の場合より苦勞は少ないだろう。それだけの国力を日本はつけてしまっていて、一人の青年を支えているのだと思った。

安岐は自分の学生時代について考えていた。ブラジルに來なければ、今頃は日本で画家の生活を送っているだろうか。あるいは、何処かの会社で美術か宣伝の仕事をしているのかも知れない。大学に入学した年に、米軍立川基地の拡張に反対する運動があった。十月には警官隊と大衝突をして、何百人も負傷者を出す運動だった。安岐は政治運動に特別の関心などなかったが、別の大学に通っている同じ下宿の友人に頼まれ、一緒に基地拡張反対のピラを渋谷駅に配りに行って、警官に逮捕された。友人の方はうまく逃げたために、留置されたのは安岐一人だった。十九歳の安岐は留置場で慄えあがった。それが今でも屈辱のように思い出されるのだった。郷里からは父が駆けつけてきて、彼を叱った。身元がはっきりしてからは、すぐ釈放されたが、父は郷里に帰らせようとして、長く送金を断ってしまった。安岐はそれからは育英資金とアルバイトで生活した。小森の叔父は同じ下宿にいた大学生で、今では新聞記者になっていた。

一九六〇年、芸大を卒業した年の九月に、安岐はサン・パウロに來た。彼はブラジルで農業を営もうとする移民たちと一緒に横浜から船に乗ったが、最初から画家として生活することを考えていた。遠い親戚になる一家が戦前にブラジルに移民し、何人かいた子供のうちの一人がジョゼ・高木と名乗る画家になっていた。安岐が芸大の学生の時に東京で日系ブラジル人画家展が開かれ、高木は來日した。高木はブラジル国展で何度か入賞していたし、リオ・デ・ジャネイロ国立近代美術館展でも金賞を得ていたから、ジョゼ・高木の名は親戚中に知られていた。その高木が郷里の熊本に墓参のために帰った時、安岐の父は東京で絵の勉強を続けている息子のことを相談したら

しかった。安岐は父からの連絡で高木に会い、高木は卒業後ブラジルに來ないかと誘った。それがきっかけだった。ブラジル行きの船賃は、和解した父が出してくれた。

しかし、安岐はその頃ブラジルについての知識も乏しかったし、画家としての勉強がしにくいようなら、更にアメリカからヨーロッパへ行ってもいいと考えていた。ブラジルからなら、アメリカもヨーロッパも日本からよりはずっと近いはずだった。

安岐は日本を離れることに特別の感傷はなかった。彼は船に乗る前に泊った横浜の外航旅館で、ブラジルに帰る老夫婦と知り合いになり、結局はサントスに船が着くまでの四十五日間を同じ船室で過ごした。広島から來たその夫婦は戦前に移民として渡り、戦争中に帰国して、また息子が農園を営んでいるサン・パウロの郊外に帰るのだった。あの頃の若い安岐は老夫婦を自分とは全く無縁の相手と思っていた。老夫婦は外航旅館にいる間に、東京に出て、靖国神社に参詣するような人物だった。船が大栈橋を離れてゆく時には、夫婦そろって甲板に立って涙ぐんでいた。目の下の栈橋には、見送りの人たちが百人以上群がり、何本かは幟旗も立っていた。移住してゆく人の名と、「奮闘を祈る」というような墨の字が海風に舞いあがる布から読みとれた。しかし、安岐はそんな風景よりは、大栈橋の反対側に停泊している外国の豪華客船の真白な船体と、二段になった客室のデッキからこちらの方を眺めている金髪の男女や可愛らしく動き廻る子供たちに見とれた。ブラジルで、それらのものはもっと身近になるだろう。今よりはずっと自由になることだけが望みだった。

しかし、四十を過ぎてからのここ数年、安岐は時どき老夫婦を思い浮かべた。夫の方はもう六十代の半ばだった。日焼けした顔とゆっくりとした目の動きが、広島にいた時も農業をやっていたのだと思わせた。口数は極端に少なかった。妻の方がよく喋った。日本に帰って来る時には兵隊に取られることが心配で息子だけはブラジルに残してきた。一緒に連れ帰った娘の方は、広島の原因で死んだのだと言う。これで日本も見納めだと妻の方が言う、脇で夫は微かに笑っていた。

安岐は、今頃になって諦めに近い老人の表情を思い出す自分の気持がよく分らなかった。少くとも、あの頃は日本的なあらゆるものから遠ざかることに闘志のようなものを感じていた。だから、あの老夫婦は若い安岐が我慢しながら同室していた相手だった。その証拠に、四十五日も一緒に暮したのに、老夫婦をスケッチすることさえしなかったではないか。安岐は記憶のなかで自分が作り変えたに違いない老夫婦の顔を思い出している。それは、無口で静かな、古い日本人の顔になっていた。その顔に、死んだ父の顔までが重なってゆく。父は小学校長だったし、無口とは正反対であったが。

車を玄関脇の車庫に入れると、物音に気づいたらしく、助手のミツダ・トモオが玄関の戸を開けて、安岐を迎えた。ミツダは二世で、安岐の助手として住み込みで働いている。日本語はたどたどしいが、料理は旨い方だ。妻と別れてからの安岐は独身生活を続けていた。洗濯や掃除のためには、黒人の女中が週に三日通ってくる。

安岐はミツタを自分の部屋に引き取らせると、居間のソファに坐りこんだ。酔いの覚めるのが物足りなくて台所に入り、冷蔵庫から氷を出し、水割りウイスキーを作ると、コップを抱えて戻ってきた。

今夜は気持が日本に寄り過ぎているようだった。今の気分で奥のアトリエに入る気にはなれないまま、安岐は靴を脱いで、ソファの上に胡坐をかいた。彼は二十年前の東京の街なかを歩き廻っていた青年時代を思い出した。ブラジルに來た年に、東京では新しい安全保障条約をめぐつて、反対運動が昂揚していた。安岐の周囲でも、反対のデモに加わった友人が多かった。安岐はブラジルへの渡航準備のために忙しかったし、六月に学生と警官隊が衝突して女子学生が死んだ時は熊本の家に行った。デモにも加わらなかった。彼は警察に逮捕されるようなことがあってブラジルに行けなくなることをも怖れていた。それでも、一年生の時の留置場の記憶があったし、学生たちが逮捕されてゆくニュースは心を苛いらさせた。学生たちを弾圧する国家の手から一日も早く自由になりたいと思った。芸大時代の絵の仲間たちも、誰よりも早く日本を離れることのできる安岐を祝福していた。

ブラジルに來てすぐに、ジョゼ高木はサルヴァドールにスケッチ旅行に出るように勧められた。サルヴァドールにはポルトガル人の手で作られた教会が数多くあることだけでも安岐を惹きつけた。街並はひどく垢抜けてヨーロッパ風なのに、黒人の多い都市としても知られていた。安岐はジョゼ高木の紹介してくれた日系人の家庭に四週間滞在して、スケッチに歩き廻った。サン・

パウロでは、日系人が多いし、外国に來たという実感さえ薄かったが、サルヴァドルでは、白人と褐色の混血児と黒人が街にあふれていた。坂の多い、立体的な街の構造も気に入った。赤土色の古い瓦をのせた屋根が重層して一番高い所にバロック式の教会の塔が見えたりする。恐ろしく丹念に石を敷きつめた道があった。一つ一つが丸味をもった石で、そこが「黒人の頭の道」と呼ばれているのを知ると、自分の足がそれを踏みつけているせいか、十九世紀の終り近くまで続いた奴隸制のことが頭に沁みついた。ペロウリーニョという奴隸を拷問した石畳の広場では上半身裸の黒人青年たちがサッカーボールを蹴りあっていた。その隅で周囲の建物をスケッチする時など、日本というものがようやく体から脱けていったような満足があった。

安岐が宿にした日系人の家庭はセチ・デ・セテンプロ通りで人形店を開いていた。店主の戸田善八は五十歳ほどだったが、夕方汗まみれの安岐が帰ってくると、待ち構えるようにして安岐を話し相手に選んだ。ピングと呼ばれる砂糖黍から作った蒸留酒を戸田は毎晩飲む。酒の肴は胡瓜に味噌をつけたものをよく食べていた。そうした言わば純日本風な晩酌のやり方に理解があるのは戸田の妻ぐらいで、ブラジル人の妻を貰っている息子はカトリックの信者になっていたし、露骨に批判的な表情をみせていた。息子は店を閉めると、早ばやと自分たちの住居に帰ってゆく。ブラジル人の妻は、時々ま顔をみせるだけだった。

十代の終りに熊本からブラジルに移住したという戸田善八はポルトガル語を十分に話せない。店での客への応対は息子にまかせて、自分は妻と一緒に木彫人形の仕事場にいる職人だった。ビ